

個人研究発表要旨

啓蒙黎明期の歴史研究——ニコラ・フレレの歴史擁護と宗教批判

高橋 駿仁（社会学研究科博士後期課程）

18世紀において、さまざまな学問が萌芽の形でその姿を現していた。フランス歴史学の始まりを19世紀のジュール・ミシュレに置く向きもあるが、啓蒙黎明期（17世紀末から18世紀前半のことを本発表ではこのように称する）のフランスにおいてすでに歴史学確立のために奮闘していた人物がいた。それが、碑文・文芸アカデミーの会員で終身書記も務めたニコラ・フレレ（Nicolas Fréret, 1688-1749）である。

ポール・アザールによって「ヨーロッパ精神の危機」と呼ばれたこの時期には、さまざまな価値観の顛倒が起こり、「歴史」にもそのような事態が生じた。この時期のフランスの知識人たちの歴史に対する態度はいくつかにわけられる。一つは、デカルトやデカルト派の知識人たちによる徹底的な歴史批判である。彼らは歴史を現実味のない空虚な語りとみなし、学問から排除しようとした。他方で、この時期には護教論的に歴史を擁護しようとする動きも見られた。聖書の記す物語もまた一つの歴史であり、それらもまとめて批判されてしまうことはキリスト教にとって不都合だった。そのような状況において、アントワーヌ・アルノーとピエール・ニコルによる、いわゆる『ポール＝ロワイヤル論理学』のように、歴史研究のための方法論を確立しようとする人々が現れ、さらにリシャール・シモンが『旧約聖書の批判的歴史』その他で示したように、聖書の歴史を正確に理解するためにそれを批判的に検討するものまで現れた。

このように、「歴史」が一方では学問として認められず、他方では神学の補助学問としての扱いを受けていた時代において、フレレがどのように歴史学の自治を目指していたのかを検討するのが本発表の主眼となる。分析の際にとくに注目するのは、フレレが残した大量の論文のうち、聖書の記す「聖なる歴史」についてのフレレの考えを読み取ることができるテキスト群である。フレレは宗教を歴史学の障害とみなしていた節があり、アカデミーで発表した文書では暗に批判し、地下文書においては明確に批判している。この種のテキストの読解を通して、フレレによる歴史学のための闘争について考える。

したがって、本発表ではまず、フレレ以前に「歴史」が置かれた状況を確認した後、フレレ自身が示す歴史研究の方法論を検討する。そしてその方法を用いて実際にフレレが歴史を分析するさまを、彼のテキストの中に見ていく。